特別寄稿

今井福治郎先生の思い出

川﨑　キヌ子

白木蓮が咲く頃になると、今井先生がいつも「寂しいなあ」とおっしゃっていらしたことを思い出す。この花の咲く三月は、別れの季節。卒業式を終えた学生たちが、それぞれの場所へと旅立っていくからである。学生思いの先生らしいなあ、と、その言葉を伺っていたものであった。

はじめて先生にお会いしたのは、昭和二九年四月、和洋女子大学の短期大学部に新設された、国文科の最初の入学生になった時であった。この新設にあたっては、国文科の専任の今井福治郎先生、賀古明先生、鈴木正彦先生方のご苦労が並々ならぬものであったことを後に伺っている。そして私は第一回生として、また卒業後はずっと同じ研究室で、十五年間ご一緒することになった。そのような恵まれた環境の中で過ごせたにも関わらず、私は日々の仕事をこなすのに精一杯で、研究に関するご指導を頂けるような状況ではなかったことが、大変悔やまれる。

今井先生に関するエピソードは数え切れないほどあるが、その中で特に印象に残っていることをいくつか紹介したい。

講義の時の今井先生は、いつも笑顔で教室に入っていらした。ある夏の暑い日、先生が講義を始めようとすると、遠方から通学していた学生が一番前の机にうつ伏せになり、すやすやと寝ていたのが目に入った。周りはハラハラしながら見ていたが、先生はご自身の扇子を出し、寝ている学生をしばらく扇ぎ、「今日は暑いなあ」と笑いながら講義を始めたのであった。先生が叱らなかったのは、学生が疲れていると思ったからであろう。このような先生を学生たちは慕い、いつも真面目に授業を受けていたものである。

先生は、「田舎で師範を出ても、地元の学校で教員を続けて、

最後に校長で終わったとしても、後は保険の勧誘として歩くだけ。そんな人生はなあ」と思い、それまで勤務していた山梨県の小学校を退職し、上京して國學院大学に入り直したとおっしゃっていらした。そうやって苦労された経験からか、私たちのような若い者には口癖のように、「学者が金儲けに走ると、研究ができなくなって、学問が荒れるんだよ」と、一本でも多くの論文や本を書くようにと励ましてくださった。

また、実地踏査の大切さについても折に触れて語っていらした。先生からよく伺っていた与謝野晶子については、いつか自分で調査して書きたいと思い続け、退官前に『満蒙遊記』についての本（『満州の歌と風土―与謝野寛・晶子合著『満蒙遊記』を訪ねて』おうふう、平成一八）を出すことができた。三十九日間を大連から哈爾浜までの晶子たちの足取りを追ったのも、先生の言葉が身に染みついていたからである。本を出したことを先生に報告することはできなかったが、きっと「そうかい、よくやったな」と褒めてくださると勝手に信じている。

昭和四二年の暮れ、先生が突然入院された時、卒業生の杉浦加代子さんとお見舞いに伺った。先生の残された研究室費を届けるためでもある。「いいのかい？研究室は大丈夫かい？」と言う先生に、私は「何をおっしゃるのですか。これは先生のものですよ」と押しつけるようにお渡しした。というのも、先生は日頃から、テキストの売り上げの割引分なども受け取らず、その分を学科の研究室費として預けていたからである。会合の飲食なども「飲み食い分は、各自で支払いをさせなさいよ」とおっしゃっていて、お金の使い方の善し悪しを教えてくださったのであった。この時もやっと受け取られ「ありがとうよ」と明るくおっしゃった先生と別れた帰り道、杉浦さんと泣きながら歩いたのは、これが最後だという予感があったからであろう。

千葉県の文化財専門委員でもいらした先生が、神事について調査された際に詠んだ歌の中から、次の一首が刻まれた歌碑が千葉県東金市の御殿山にある。これは今井先生の大ファンでもいらした、東金の小川一郎氏が建立されたものだ。

あさまだき御殿山の竹林におぼめく影は齋竹掘る人　白水

先生が亡くなって今年で五十三年になる。和洋女子大学のキャンパスもすっかり様変わりしてしまった。今井先生を覚えている人も少なくなってきた。それでも私は毎年どこかで白木蓮の花を見るたびに、先生の笑顔を思い出すのである。

（かわさき・きぬこ／和洋女子大学名誉教授）